

# [書評] 関口裕子 日本古代家族の規定的血縁紐帯について

著者	梅田 康夫
雑誌名	法制史研究 = Legal history review
巻	29
ページ	166-169
発行年	1979-01-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/17030">http://hdl.handle.net/2297/17030</a>

# 關口裕子「日本古代家族の規定的血縁紐帯について」

(井上光貞博士還暦記念會編『古代史論叢』中巻所収、吉川弘文館)

近年の女性史研究の高まりのなかで、昨年中、西村汎子(『今昔物語』における婚姻形態と婚姻關係——高群逸枝説への疑問——、『歴史評論』三三五)、脇田晴子(『古代中世日本女性史覺悟』、『歴史評論』三三五)、武田佐知子(『子女の歸屬に關する一試論——大寶二年籍を中心として——』、『史観』九八)、氏等の女性研究者により、奈良・平安期の婚姻形態と家族構造に關する何點かの論説が提起されたが、關口氏の本文は、なかでも最も本格的な實證に富み、かつ從來の古代史研究全體に對する挑戰的な姿勢で貫かれたものである。西村氏や脇田氏が故高群逸枝の業績を限定的にのみ評價するのに比べ、關口氏は、奈良・平安期の家族については高群説をほぼ全面的に擁護する。その立場から氏は、高群説においてまだ假説にとどまっているとする點、すなわち律令制國家期の家族の血縁紐帯が女系であることを實證的に確認せんとする。そして、何らかの意味で男系により構成された家父長制家族を想定する從來のあらゆる古代家族論、およびそうした家族論を基に築かれた古代社會論に對し、根本的な再検討を要求する。關口氏はすでに、「律令國家における嫡庶子制について」(『日本史研究』一〇五)、「律令國家における嫡妻、妾制について」(『史學雜誌』八一)、(『日本古代の婚姻形態について——その研究史の検討——』、『歴史評論』三二二)、等の古代

家族に關する一連の研究を發表しているが、そこにおいて示唆されてきた問題が本文において最も先鋭かつ明快な形で提起されている。

さて、律令國家期の家族の基本的血縁紐帯を女系とする關口氏の論證は、具體的には、計帳の逃亡注記についての分析、籍帳の片籍關係についての分析、碑文における系譜關係の分析、改姓記事や戸籍における冒母姓についての分析、等から導き出されている。關口氏が女系という場合、創始の記述から明らかにように、それはもっぱら「現實の家族・血縁集團への歸屬」(出自)(四八五頁)を意味している。關口氏の構想においてまず第一に問題となるのはこの點である。氏の論理では、職分または位階の傳遺とかかわる姓の繼承の問題が、男系・女系を區別する規準から結果的に除外されている。出自の問題を第一義に考えねばならないものなのかどうか、その點が明らかにされない限り、女系の血縁紐帯の論證からだちに家父長制家族の否定に進むのは短絡的という批判を免れざるを得ないであろう。脇田氏は、「律令制官僚機構から女性がいじめ出されていたことは根幹的なことである」(前掲論文六〇頁)として、階層的差異を前提にした上での家父長權と家父長制家族の成立を基本的に認める。關口氏のように、姓の繼承と出自は異なる次元の問題として兩者を全く分離してしまうのでは、當時の家族のあり方を全體的に捉えることが困難となるのではあるまいか。

第二に、問題を「現實の家族・血縁集團への歸屬」(出自)に限定したとしても、それを關口氏のように全くの女系によるも

のと捉えるには少なからぬ疑問を感ずる。ただし誤解のないようにいっておくと、關口氏が律令制社會の家族における女系的な血縁紐帶の存在を實證したこと、そのこと自體については私は積極的に評價したいと思う。律令制社會の家族を家父長制家族と捉える従来の論者にあつても、その血縁紐帶を一義的に男系とみることに必ずしも確信をもっていなかったことは、たとえば石母田正氏（『古代家族の形成過程』、『歴史科學大系』2）『古代國家と奴隸制』一二四頁）や青木和夫氏（『シンガポールの日本歴史』4『律令國家論』一九五頁）の表現から窺える。そういった意味では、當時の史料に基づいて實證的に、女系による血縁紐帶の存在を指摘した關口氏の功績は非常に大きいといわねばならない。しかしながら、そこから更に一步進んで、當時の血縁紐帶をもつばら女系によるものとして捉え、女系的血縁紐帶こそが規定的であつたとするならば、その點については安易に従えない。ごく素朴に考えて、氏が説くようにもし現實の家族が全くの女系的血縁紐帶に基づくものであつたとするならば、はたして男系的な原理によつて貫かれた律令の繼受という事態がそもそもあり得たかどうか、という疑問が當然に湧いてこようし、また、男系を編成原理としている籍帳が、人民支配のための國家的な要請により作製された全くの擬制にすぎないものである、とはたしていいきれぬかどうか大いに疑問となる。そういう點で關口氏の實證的分析を少しく仔細に検討してみると、いろいろ問題を含む部分のあることに気づく。

まず、計帳における逃亡注記の分析から検討する。第一に、

表I・(4)の事例（四三三頁の(4)の誤りと思量する）を、逃亡集團が三姉妹を中心に結合されている例とするが、そのこと自體については異論がないとしても、この三姉妹が正六位下出雲臣大嶋の戸に属していることを全く等閑視していることは遺憾である。この三姉妹が結婚後も父母の籍にとどまり行動を一緒に得た背景には、戸主の位の高さにあらわれているような有力戸に属していたこととの關聯があつたのではなからうか。西村氏は、「複式妻方居仕婚は上層ないし富裕層に多く、……身分が低く貧しい層はどちらかというと單式同居婚が多い」（『前掲論文五二頁』）と指摘しているが、この事例もそうした側面からみる必要があると考える。いづれにしても、三姉妹を軸とする逃亡集團の形成は特定の條件の下で發生したことを忘れてはならず、この事例を單純に一般化することはできないと思われる。ちなみに、もし籍帳に男系的原理を貫徹させるならば、この三姉妹はそれぞれ夫の籍に付せられ、たとえ三姉妹が實際に同一行動をとつたとしても、そのことは籍帳の上には全くあらわれてこないはずである。そういう意味では、籍帳における三姉妹のあらわれ方は實態を反映したものといえる。そしてさらにいうならば、この(4)例が實態を反映したものとするれば、(4)例も實態を反映したものとしなければ片手落である。そこでは妻は戸主である夫に隨つて逃亡しており、戸主を中心に逃亡集團が形成された可能性が強い。第二に、關口氏は、(1)Aと(1)Bの兄弟姉妹からなる逃亡集團について、その結合の中心が年齢の高い姉妹たちにあるとみるが、同じく兄妹からなる(2)Aにつ

いて何も言及しないのは不公平である。結合の中心をはたして年齢の點だけで考えて支障がないか疑問もないわけではないが、その年齢の點からいっても、(2)Aでは兄が逃亡の中心であったことは疑えない。第三に、逃亡集團において、成人姉妹同士の結合例は存在するが、成人した兄弟の結合例が皆無であるという點について言及しよう。この點について私は、戸内部の課口數を一定水準に維持するという編戸の原理との關聯で考えたい。安良城盛昭氏が明らかにしたように(『歴史學における理論と實證』第1部、七四頁)、逃亡等により課口が減少した場合、課口數を一定に保つべく造籍に際して新たな編戸が行なわれた。成人兄弟が同時に逃亡した場合、それは課丁二名が一舉に減少することを意味した。かかる状態がそのまま放置されたとは思われず、新たな編戸が試みられたはずである。その結果、計帳上に成人兄弟同士の形で逃亡例が現われる可能性は非常に少なくなる。姉妹の場合についてはそういうことはなく、以前の逃亡時の關係がそのまま残されることも可能であった。逃亡注記に成人兄弟の結合例が存在しないことをもって、父系の合同家族が存在しなかったとはただちにいいないと考える。

つぎに、籍帳の片籍關係の分析について述べる。關口氏は、籍帳上の夫婦同籍率の變化を片籍子女の父貫率の變化との關聯で捉え、その背後に里制から郷里制への移行に伴う律令國家の人民把握方式の相違をみている。籍帳にあらわれた婚姻形態についてこれまでのいろいろな説が提示されたが、前述した武田氏の論稿を含め、籍帳の統一的理解という點ではたしかに關口氏

の議論は最も説得力がありすぐれていると思う。しかし、私がよく理解できないのは、「本来男系主義が貫徹すれば、籍帳上の夫婦同籍率と片籍子女の父貫率は、共に高くなるはずである」(四四〇—一頁)るが、そうならないのは現實の家族が女系紐帶によつていたからであるとする點である。男系の原理の實現の仕方が國家的な政策により容易に動かし得たという點から、籍帳の記載が實態を忠實に反映したものでないということはいえても、しかしそのことからただちに男系ではなく女系が實態であったとは必ずしもいえないのではなからうか。私にとつては、夫婦同籍と所生子父貫の比率を合計すると、各籍帳において大體一定した比率があらわれてくることの方がむしろ興味深い。いってみれば、その比率は男系の原理で把握することが可能であった部分であるといえる。かつての石母田正氏の差別的別居制説にとつて、京畿の計帳は一つのネックになつていたが、石母田説の適否は別として、關口氏による籍帳の分析成果を石母田説の立場から援用することもあながち不可能ではないように思われる。

最後に、碑文の分析について述べよう。山の上碑の分析については特に述べることはない。時代と地域からいって女系の優位性は當然に考へ得る。ただ強いていうならば、たとえ女系優位であったにせよ、ここでは男系と女系の双方について系譜關係がたどられているのであるから、吉田孝氏の双系説をも批判する關口氏にとつて、その點をいかに考えるのか一言説明があつてしかるべきだったのでなからうか。問題は金井澤碑の分

析である。この碑文は難解であり、いろいろ疑問を感じるところが多い。たとえば、現在父母は本當にすでに故人となった父母なのか、また、ニヶ所あらわれる「又」のうち最初の「又」は、本當に「池田君目頼刀自」と「兒加那刀自」を結んでいるのか、といった點である。臆することなく敢えて妄斷を述べるならば、この碑文は、「現在父母」をはじめとした「三家子孫」が「七世父母」の爲と同時に「現在父母」の爲に（「現在父母」にすれば自己のために）記したものではなからうかと推測する。そして、「現在侍家刀自池田君目頼刀自」が「現在父母」に相當し、「家刀自」ではなくたとえば「家刀國」のような男性名として碑文の文字を読むべきではないかと考える。そうすると「兒加那刀自」は「三家家刀國」と「池田君目頼刀自」の子となり、姓は當然ながら「三家」ということになる。もし以上のような解釋が可能であるとすれば、この碑文は男系の系譜關係を記していることになる。

以上、關口氏の所論に則して論じてきたが十分に意を盡くすことができなかった。もし、読み誤りや讀みの淺い點があれば、前もってお詫びしておきたい。

（梅田康夫）